

白川静のことば

《36》



金子都美絵・画

安という字のもつ構造的な意味を、人はあまりにも安易に解しすぎていたようである。改訂版の「諸橋大漢和」に、「家中に女あり、女は内を守るべきもの、女が家を守り家事につとめれば其の一家の寧らかなるを本義とす」というのは、いかにも俗解である。
 〈中略〉

安のト文や金文の字形には、女の上に小点をいくつも加えた形や、女の裾に衣服をそえるように曲線を加えている形がある。ㄣはト文や金文では、宗廟のような神聖な建物を示すことが原則である。女はおそらく、他家から新たに嫁してきた婦人であろう。他家からの女は、異なる氏族神のもとにあつたものであるから、嚴重に祓い清めて、この家の氏族霊のゆるしを受け、その霊になじまねばならない。新しくこの家の霊を身にそえる儀礼を行なつて、はじめてその家廟につかえることができるのである。

新しい受霊のためには、まず灌礼をして、身を清めなければならぬ。安の字形において、女の周辺にしろさされている小点は、その灌礼を示す水滴と考えてよい。そしてその上で、新しくこの家の霊を身に受けるのである。裾にそえられている曲線は、わが国でいえば「真床襲衾」にあたるものである。大嘗会の天皇踐祚のとき、継体の天皇は川で大祓の禊を行い、受霊のための襲衾を身にそえる。そのような儀礼のしかたは古く中国にも存しており、安とはその形式による受霊のしかたを示す字である。